

第 31 回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

本年度第一回審査会は、全委員参加のもとに 2005 年 12 月 14 日、札幌市内で開催され、昨年までと同様の審査手順を確認したうえで審査対象作品の確定と第 1 次書類選考が行われた。審査対象作品は、建築賞応募作品全 8 点（(1)～(8)）に、支部主催「建築作品発表会」参加作品から委員による推薦作品 5 点（(9)～(13)）を加えた以下に示す 13 作品である。

応募作品（順不同）：

- (1) KZ-HOUSE（葛谷理俊君／アトリエ RSN、国澤利光君／ZEROM 国澤計画設計室）
- (2) 函館宮前町カトリック教会（三輪数比古君／マジックバスビルディングワークショップ 1 級建築士事務所）
- (3) 円山西町の家（松岡拓公雄君／滋賀県立大学、鈴木理君／鈴木理アトリエ）
- (4) 省エネ住宅「エコキューブ」（平野伸泰君／(有)エネシス）
- (5) 札幌東宝ビル「札幌シャンテ」（徳本幸男君・本井和彦君／㈱竹中工務店北海道支店）
- (6) 関口雄揮記念美術館（徳本幸男君・本井和彦君／㈱竹中工務店北海道支店）
- (7) sapporo. 55（徳本幸男君・河合有人君・横尾淳一君／㈱竹中工務店北海道支店）
- (8) アーバンネット札幌ビル（楠本正幸君／NTT 都市開発㈱）

委員推薦作品（順不同）：

- (9) K B（画工房）
- (10) 釧路こども遊学館（アトリエブク）
- (11) 陸別保健センター・診療所（アトリエブク）
- (12) 垂直の森（ヒココニシ設計事務所）
- (13) 中央警察署札幌駅前交番（北海道工業大学＋日本設計札幌支社）

これ以降の選考審査は、多数決でなく議論を通じて全委員の了解を得た作品とし、建築作品単体の評価規準は、コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」、時間・空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」、それらを統合して美の創造に向かう建築体としての「洗練度」とした。

現地審査対象作品を選ぶ第 1 次書類選考は、各委員の個別評価と活発な議論の末に、現地審査対象作品として 7 作品（(6)「関口雄揮記念美術館」・(7)「sapporo. 55」・(9) K B」・(10)「釧路こども遊学館」・(11)「陸別保健センター・診療所」・(12)「垂直の森」・(13)「中央警察署札幌駅前交番」を選定した。この過程の中で「建築作品発表会」作品の明確な位置付けとして、

委員推薦と応募手続きの関係が討議され、審査の公平性を期すために次年度からは従来どおりの委員推薦を必要条件、応募規定に定められた資料提出をもって応募作品としての十分条件を満たすとの合意を委員会の結論とした。

2006年2月21日に札幌市内の5作品(6)・(7)・(9)・(12)・(13)を委員7名(一部6名)、3月7日8日に道東地区の2作品(10)・(11)を委員4名で現地審査が行われた。

3月16日、札幌市内で第二回審査会が出席委員6名で開催された。各作品の現地審査結果として、1名の欠席委員からの提出書面を含めて全委員から意見が表明され、続いて各作品についての自由討議が行われたので以下にその要点を述べる。

「関口雄揮記念美術館」: 大小2つのRC造閉鎖空間と中間に配された木造スケール鉄骨造の開放空間というシンプルな設計プログラムに特段の先進性は認められず、鉄骨部分の構造表現には論理的不調和が指摘される。鉄無垢角柱の選択によるスケールダウン、エコロジカルな空調システム、通行不可だった既設吊橋の再生による既存美術館とのネットワーク構築などに先進性を認めることができるが、いずれも部分的評価に留まる。

「sapporo. 55」: 札幌駅南口広場に面した公共用地に民間ビルを建設する事業コンペの実施作品で、屋内公共空間の確保と採算性の維持という複雑な要件を都市デザインとして実体化した企画プログラムの先進性と規範性は評価できる。しかし、トップライト採光の上部3層吹抜け空間で、内部の外部空間化と1・2層階部分で視界の立体化による賑わいの創出に挑戦した設計プログラムは、駅前広場との空間的連続性を持たず演出としての評価に留まる。外壁デザインにおける質感の希薄さを含め、全体的に建築としての洗練度に課題が残る。

「KB」: 間口の狭い敷地に設計者自身のアトリエ用として建てられた5階建ての小さなビルで、一体化した門型のPC部材を水平垂直方向に連続展開して壁面と床面を構築した設計プログラムは、力強い素材感と構造の純粋性を形態化した隅角部の曲面が生み出す柔らかいリズム感とによって、新鮮な建築表現を創出すると同時に内部空間の最大化を達成している。この点での先進性は高い評価を得たが、対照的にファサード面を階段・設備空間で閉鎖したプログラムの弱点が浮かび上がる結果となり、隣接する住居建築との関係構築に対する疑義と合わせて規範性と洗練度において賛同を得られていない。

「釧路こども遊学館」: 先進性・規範性・洗練度のすべてに対して全委員から賛辞が述べられ、北海道における公共建築のあり方と高い可能性を示した建築作品として北海道建築賞の候補作品となった。評価の詳細は別掲の審査講評に述べられているが、ガラスと構造斜材で構成された外皮部分に見られる建築表現としての曖昧さに対しては、欠点としてではなく、「こども

と市民に対する親和性」を獲得するための重要なデザイン表現として、むしろ評価すべき長所と解釈されたことを付記する。

「陸別保健センター・診療所」：複合化された公共建築として、2 施設共通の開放空間に個別機能空間を並置するシンプルな基本プログラムの建築的表現として、均一な幾何形体の反復による図式的平面構成を採用している。プレストレスPCユニットで構成された屋根面による開放空間は、公共性とバリアフリーを意図したとも考えられるが、実態としては閉鎖系・開放系空間と機能性とのずれによる音・光環境など不適切な部分が見られる。コンセプトの純化を追求するあまり規範性の低下が表面化し、建築としての洗練度を失うという結果となっている。

「垂直の森」：鉄骨補強木造2階建・キューブ形の小住宅で、内部は構造柱のない上下一体化された空間と家具化された機能エレメントで、外壁面は等間隔の構造柱に均一壁面パネルと開口パネルとで構成されている。将来の解体移築も含めた多様な生活状況への対応として提示された「部品化された建築」という先進的プログラムは、一方で不安定な住空間という側面を実体化させ、プログラムとしての普遍性を達成できていない。

「中央警察署札幌駅前交番」：難解なコンテキストの場にガラスと耐候性鋼板のシンプルな面構成によって現代都市美を表現した作品で、景観的配慮から知的抑制された設計プログラムの先進性と繊細で洗練された建築単体としての造形が高い評価を受けた。反面、多くの市民と来訪者には交番自体の認知が困難な結果となり、場の重要性に対する規範性の弱さが欠点となっている。

審査討議の後、本年度の受賞作は、北海道建築賞に「釧路こども遊学館」（保科文紀／元アトリエブク、金箱温春／金箱構造設計事務所、石黒浩一郎／アトリエブク）、北海道建築奨励賞には該当なしを全委員一致で決定した。

なお、受賞作は完成まで7年間を要したため多くの設計者の連携によって実現した。4月5日、4月16日の両日、札幌市内で委員会を開催し北海道建築賞表彰規定の「主たる設計者」の明確化を図った。濃密な議論を通して「受賞対象者は、設計プロセス全体の実質的な設計統括責任者であり、原則1名である」との合意を得たうえで、今回の受賞作はその実態から前記3名を設計統括責任者と認定した。

全体的印象としては、文明としての先進的技術に偏る傾向が強い反面、日常へのまなざしが紡ぎあげる文化としての建築という原点が失われつつあると感じた。形態と技術の操作にではなく、原点の現代的認識の中にこそ新しい鍵が隠されていることを再確認したい。

（文責 大萱 昭芳君）

第31回 北海道建築賞

石黒 浩一郎 君 金箱 温春 君 保科 文紀 君 「釧路こども遊学館」の設計

「地域に本来の公共建築をつくる」この思いが結実した建築である。

公募型コンペの実施から建設まで6年近くの時間を要した釧路こども遊学館は、基本設計・実施設計の過程で、地元市民らが組織した「釧路こども遊学館をつくり、育てる会」が、最終的な施設の運営を念頭において利用面だけでなく、展示面、運営面も含めた様々な提案を行った。それを設計者は、ワークショップ等、様々なコミュニケーション・ツールによって丹念に汲み取り設計のプロセスを進めたのである。

この建築が盛んに利用され、様々な企画や活動が行われている現在の様子を見ると、昨今の利用者不在での公共建築の建設や表面的な指定管理者制度の運用による第三者の公共施設の管理、さらには設計プロセスを無視した設計業務の発注といった問題に対して、設計者とユーザー、発注者の着実に真摯な対応があって初めて、すべての市民に活用される公共施設が誕生するのだということを教えてくれている。

このような建設プロセスは決して容易ではない、大変煩雑なプロセスである。実施設計というハードの取りまとめをしなければならない中で、同時にこのようなソフトの取りまとめとファシリテートをしていったことに対する設計者の新しい挑戦と問題意識は高く評価される。

設計者の挑戦する姿勢は、敷地やプログラムに対する建築としての対応にも及んでいる。敷地は、シビックコアとして魅力とにぎわいのある都市拠点を形成する事業エリア内にあるが、そこがもともと鉄道駅であったこと、都市の中心部であったことといったコンテキストは跡形も無くなっている。新たな都市再生の拠点として、合同庁舎も隣接地に建設されているが、機能的に、遊学館とまったく連携するものはない。そのような現在の都市的状況の中で設計者は、「地域の建築」を成立させるために建築の形式性をしたたかに操作することで見事に独自性を表現している。

建築の内と外を隔てる境界は、ガラスのスクリーンと斜め柱、水平のトラス梁によってみごとに消し去られ、市民に開放された全天候型広場と円形の砂場といった外部的要素は、建築の内部に存在する。内と外の消失である。円形の砂場の上には、卵型のプラネタリウムが4層吹抜の中に浮遊し、さらにはそれと対峙するかのよう長円形のループスロープの白いボリュームが今度は2層吹抜を上下に重ね合わせた空間を貫いて伸びる。それぞれは、特徴を持った形態素であるが、それらを包み込む曲線のガラスの外皮によって全体としてのバランスがもたら

されている。また、敷地割の特徴から生まれる建築周囲のオープンスペースに沿って変化する視線の角度や位置に応じて見え隠れする形態の重なりの変化が、表皮のガラススクリーンからは想像できない奥行と領域感を与えている。従来の建築が持つ形式性をあえて排除することで、敷地＝場所における建築の存在の意味を表現として定位させている。

子どものための空間、子どもの場＝子どもの領分にふさわしい空間のスケールとボリュームの設定という、子どものための機能を有する建築がもたらす形式性 に対しても釧路子ども遊学館は異を唱える。大きなスケールの空間のあいまいな連続の中に子どもたちの場をちりばめていることが、そこにある遊具や展示とも 呼応して新しい身体性を創り出す。それは、固定化されたプログラムを拒絶することが子どもたちのアクティビティを最大限に引き出すことになるという、子ども＝人というこの建築に対する主人公にとって本質的な空間のあり方とは何かという設計者の問題意識の具現化なのである。

これにさらに寄与しているのは遊具や展示什器のデザインである。得てしてこの種の建築がテーマパーク的になりがちなのは、遊具や展示什器にもその原因があるが、ここでは統一され抑制されたデザインコントロールをすることで、結局子どもたちの活動を主軸とした空間構成が成立しているのである。

建築自体からも建築とそれを取り巻く周辺からも、その地域からも既存の様々な形式性から離脱することがこの建築の目論見であり、ラディカルな追求であった。しかし、それを支えているのは高度な技術である。表皮が一体性を持った透明ガラススクリーン、個々のボリュームが分節され、自立した構成、そして大きな気積。こういった建築のプログラムをどのような建築技術を用いて解いていくかという点においても、意匠性を失わない。しかし、それでいて構造的技術に裏打ちされた構造設計、釧路という地域の気候を十分考慮してそれに応じた室内環境の設計は、モードに流されない地域の建築としての規範性すらも獲得している。

以上のようなこの建築に対する様々な挑戦の集積を北海道建築賞として高く評価するものである。

(文責：小篠 隆生君)